黄金の魔術師

稲葉修一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄金の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ１６５０ＢＡ

【作者名】
稲葉修一

【あらすじ】
黄金の種を見つけた。
黄金の器を見つけた。
黄金の知を見つけた。
果たしてこれは人の手に余る物なのか……分からない。けれども、黄金の魔術を行使すれば未来は約束される。
永遠の地『エターナル』にて全てを終わらせよう。
愛しき双子のために――。
※下書き用に投稿しました。文や内容が整っている訳ではござい

ません。また、エブリスタにも同様の小説を掲載する予定です。

プロローグ

「アルク、お前は明日を持ってエルマニアの姓を名乗ることを禁ずる」

「お父様……それは……どういうことですか……」

夕刻を回った頃、アルクは父親に呼び出された。

広い書斎の中、大きな書机を挟み、大柄な男性と小さな子供が相対している。エルマニア家現当主、ガルフ＝エルマニアとその息子、アルク＝エルマニア。

稀に見る父親の厳しい顔つき。眼光。威圧。一〇歳前後の少年には過酷極まりない場だった。

アルクは父親の言葉を理解したくない。何故、このような事態になっているのかは自分がいちばん分かっている。けれども、それを認めてしまったら、崩れてしまいそうだった。だから分からないふりをした。

そんなことをしても、より自分を追い詰めることになる。しかしいまのアルクにはこうする他なかった。

しかし、もしかしたら――哀れな我が子を見た父親は意見を変えてくれるかもしれない。

そんな希望を胸に父親の発言を待つ。

「私の言った言葉が理解できないのか？」

アルクは無言で頷く。

「そうか、それでははっきりと伝えよう。アルク、お前はもうエルマニアには必要のない存在だ。今日中に荷物を纏め、明日には出ていきなさい」

アルクの想いとは裏腹に、ガルフは冷酷に突き放した。

「返事はどうした」

「っ……」

ガルフは追い打ちを掛けるように語気鋭く捲（まく）し立て上げる。

幼いアルクはそれに耐えられる筈がない。
頬から顎に伝い、一筋、二筋と涙が零れ落ちる。
「なにか言いたいことがあれば言いなさい」
悲しみに打ちひしがれるアルクを見てガルフの慈悲が動いたのか、予定になかった台詞が出てきた。
アルクは右手の甲で赤い瞳を擦り、父親の顔を縋(すが)るように見上げた。一呼吸置き、言葉にすることを頭の中で整理。
「ぼくは白銀の魔術を一つも扱えません。妹のティアラにも劣ります。ですけど、その分勉学は頑張りました。魔術基礎だって同世代になら負けません。それはこれからも維持していくつもりです」
だからぼくを捨てないで。一人にしないで。居場所を奪わないで。そう願った。
アルクは唇を強く噛む。血が滲み、鉄の味がする。
エルマニア侯爵家――アリアス王国の三大天の一つ……だった。祖父の世代までは。
王国三強と呼ばれた家系だったが、現在はその権力が低迷。存亡の危機であった。
王家との小競り合い、子孫の実力低下、領地を襲った謎の疫病……理由は様々あれど、エルマニア家は三大天の地位を王家、その他三大天家系全員の希望により剥奪。
そして、力が無くなった家系に新たな命が生まれた。双子の兄妹、アルクとティアラ。
子の世代へ移り変わる度、徐々に力を失っていく歴史を持つエルマニア家は、どうなることやらと不安に押し潰されそうだった。
しかしその不安は物色された。双子は天才だった……正確には双子の兄、アルクが。
歳が六つになる前に魔術の基礎をマスター。八つになる頃には『白銀の魔術』、自然四術《炎》を扱えるようになった。異常なまでの成長。妹のティアラもそれに負けずと、八つになる頃には魔術の基礎を理解した。兄に比べてしまえば遜色するが、世間からしたら

十分な才能。
誰もが安堵した。この子たちの代で三大天の地位を取り戻せる、と。皆、神童と称えられたアルクに期待を寄せていた。
その矢先、事件は起こった。アルクが誘拐されたのだ。屋敷中が騒ぎになり、捜索隊も出動した。
事件発生から一〇日。使用人たちの間では既にアルクは死んだ者とされていた。しかし、その日の深夜になった頃、アルクは何事もなかったようにエルマニア邸に帰ってきた。
両親は安堵の涙を流し、祖父は「この子なら当然のことだ」と言わんばかりに何度も頷いた。
アルクには誘拐されていたときの記憶がなく、しかし両親は無事に戻ってきたのだからと深く問うことは無く、今後屋敷の警備を怠らないように近衛隊に厳しく言いつけるだけに止めた。これは外部に「エルマニア邸は警備が甘く、簡単に忍び込める」と思わせないため。また、威厳を保つ――つまり天才と謳われるアルクが誘拐される筈がない、と貴族特有のプライドが働いたのだった。
犯人は分からずとも、ひとまず事が収まった、と思った。
――しかし何事も無かった、というのは思い込みで、既にアルクは大切な物を失っていた。
数日後、訓練室にてそれは発覚した。
「使えない……炎が出ない」
アルクの困惑した声だった。
彼の父親ガルフは直ぐに専属医師団にアルクを診せた。しかし原因は分からず。
思い当たる節は一つだけだった。あのとき、アルクが誘拐されたあのとき……。
アルクが戻ってきたときの姿には外傷一つ無かったため、特に深い診察をしなかった。普通なら徹底的に体中を調べ上げるのに。
いまとなってはもう遅い。アルクが使えなくなった魔術はもう戻らない。

体を切り開き細部にわたって検診すれば原因を突き止められるかもしれない。しかしこの国の医療ではそれができない。身体を切る行為は戦闘以外で行えば「神への冒涜」とされ、死罪確定であった。
戦いで相手を切るのは問題なく、医療で切ると処罰の対象。
矛盾とも言える規則にガルフは頭を悩ませた。
そしてアルクは落ちこぼれの烙印を押された。
扱える魔術は平民の使う『青銅の魔術』のみ。
得意だった剣術の腕も衰え。
妹に実力を追い抜かされ。
同世代の貴族たちの足元にも及ばなくなり。
家族には蔑まされ、果ては使用人にも。
そこに残ったのは、貴族としての存在価値がない只のガラクタ。
アルクは見放されたのだった。

アルクは自分の過去を呪った。
自分を誘拐したのが何者かは分からないけれど、そのせいで自分は居場所を失おうとしている。
「アルクよ、ここは貴族の家系だ。お前の実力ではここに残る資格がない。青銅の魔術を究めようが、いくら知識があろうが、そんなものは白銀の魔術を使える者の前では紙屑同然。懐かしきか神童の時代……哀れなり」
ガルフは蔑むような、それでいてどこか同情の念を感じさせるような視線をアルクに向けた。
「家はティアラに継がせることにした。世間を騒がせた責任はお前を勘当したことで多少は示しが付くだろう。殺さないだけありがたく思いなさい」
何が責任だ。
何が示しだ。
天賦の才を持つ子が生まれた。そしてその子の才能は失われた。

そうやって騒ぎ立て、騒動を起こしたのは大人たちで、自分のせいではない。
何故その責任を自分が被らなくてはいけないのだ。
アルクの心中は悲しみと喪失感、そして理不尽な言葉の数々でやつれ切っている。
「もうお前に用はない。退室しろ」
「……お父様……」
「私の声が聞こえなかったのか？　体質を命じたのだ」
「はい……」
いまのアルクにはどうすることもできず、頷くしかなたった。
書斎の扉をくぐる前にもう一度父親の姿を確認した。
ガルフは既にアルクに関心を示しておらず、何枚も積んである羊皮紙へと目を向けていた。
アルクは情けない自分に失笑し、書斎から出た。
全て決められた後には涙すら出なかった。
他人事のように、事実を受け入れられていないのかもしれない。
「お坊ちゃま」
扉の前で俯いているアルクに声を掛けたのは彼専属の従事、グラディウス。白髪に染まった老人。
「申し訳ございません、お坊ちゃま。旦那様にはわたくしからも進言したのですが……まことに無念でございます」
「謝らないでよ。お父様は一度決めたことに対して意見を覆したりしないんだ。だから、別にグラディウスのせいじゃないよ」
「心中お辛いのにもかかわらずそのようなことを……。立派に育ってくれてました。天国に居る奥様もさぞかし喜んでおいでしょう。それに引き替えわたくしは……情けない限りでございます」
グラディウスはすすり泣き始める。
彼はアルクにとっての数少ない味方。どんなときでも自分の傍に居てくれた。今回の件だって、相当働きかけてくれた。
感謝こそすれども、謝ってもらう必要はこれ一つとしてない。

アルクは俯く従事に手を差し伸べる。
「グラディウス……っ！？」
グラディウスに声を掛けようとしたそのとき、背中に衝撃と重みが加わった。
「にぃさま！！」
アルクは背中にしがみついた者を見る。
艶のある赤髪を二つに縛った少女、ティアラ＝エルマニア。
彼女もまた、アルクの数少ない味方。
この二人を除きアルクに好意を示しているのはコック長のロイだけ。
この三人だけがアルクの心の支えとなっている。
「ティアラか」
「そうだよっ、ティアラだよっ」
ティアラは嬉しそうに口を綻ばせる。
「久しぶりだな、って同じ屋敷に住んでいてこの言葉はおかしいかな」
アルクとティアラが顔を合わす機会はあまりない。
日々の大半を実技訓練で費やす妹と、日々の大半を魔術理論を学ぶ兄では接点がない。それに加えティアラの従事はアルクと顔を合わすことに不快感を覚えている。アルクに対して嫌悪感を抱いている。
使用人がアルクに何を言おうが当主は口を挟まない。だからアルクが貴族だろうと関係ない。むしろ貴族相手だからこそ、これ幸いにと汚い暴言を吐いている。
アルクはティアラを一度背中から降ろす。
ティアラはアルクと違い、まだ精神的に幼い。汚れを知らない無垢な笑顔はより一層幼く見せる。
「にぃさま、いまお暇ですか？」
「それなりには、ね」
「じゃあいまからあたしと遊びましょう！」

「それは……」
アルクは少々渋る。これからやることを思い出す。荷造り。これから生きていくために必要な物を選別しなければいけない。
現在の刻は日が落ち切り、外は真っ暗。早めに用意しなければ明日――日付が変わるまで――に間に合わない。
日付が変わればアルクは問答無用に追い出されてしまう。
「ごめん、ティアラ。いまからやることを……」
そこまで言って、アルクの言葉をティアラが遮る。
「あれ、グラディウス居たんだ。気づかなかったよ」
アルクばかりに目がいっていて、グラディウスの存在には気づかなかったようだ。
ティアラはグラディウスの俯いた顔を覗き込み、不思議そうな表情になった。
「グラディウスは何で泣いているの？」
「これは目にゴミが入ってしまいまして。悪戦苦闘の最中でございます」
「ふぅん。大変そうだね」
たいして関心を見せず、ティアラは再度アルクに向き直る。
「ねぇ、にぃさまいいでしょ？　たまにはあたしのこと構ってよう」
「その、ぼくはいまからやることがあって」
アルクはティアラの頭に手を載せて撫でる。
ティアラは不満そうな顔と気持ちよさそうな顔が入り混じっている。
「お坊ちゃま、支度のことでしたらわたくしにお任せください」
「いいの？」
「もちろんでございます。お嬢様のお相手をして下さいませ」
「ありがとう、グラディウス」
「やった」
二人は小さな歓声を上げた。
「じゃあ、にぃさまのお部屋に行っていい？」

「ぼくの部屋はいまからグラディウスに掃除してもらうんだ。だからティアラの部屋でいい？」
「分かった！」
満面の笑みを浮かべるティアラと、少し後ろめたさを感じるアルク。
勘当されたなんて言えない。もしもいま言ってしまえば、ティアラから笑みは消えてしまう。
どのみち明日には知られることになるだろうが、いまだけはこの笑顔を見ていたい。
二人はグラディウスと一度別れ、嬉々悠々と部屋に向かおうとするが……。
「まあまあお嬢様、こちらにいらしたのですね。探しましたわよ」
濁った女性のだみ声が聞こえた。
最悪だ、とアルクは思った。
ティアラの従事だ。
醜く膨れた肢体に厚化粧。それなりの衣服を着こんでいるのは彼女がエルマニアの分家に当たる者だから。
一応貴族に当たる彼女が――階級は低いが――従事をしているのには訳がある。
表だってはあまり知られていないのだが、彼女の家は事業に失敗し多額の負債を抱えている。それを本家であるエルマニアが肩代わりしているのだ。
それに負い目を感じてか、自らティアラの従事者に志願したのだ。
その働きぶりは立派なもので、何事もそつなくこなし、ガルフからの信頼が厚い。また、エルマニア現当主であるガルフに対しての忠誠心は本物。
ただし、その忠誠心はガルフだけのものであり、アルクやティアラには向けられていない。
そして使用人の中でもっともアルクのことを目の敵にしている存在。

ガルフ同様、力の無くなったアルクをまるで汚物でも見ているかのようにしている。
「さあさあお嬢様、こんなところに居ないで部屋に戻りますわよ」
彼女はティアラの腕を掴み、兄妹を引き裂く。
「やだ！　あたしはいまからにぃさまと遊ぶの！」
「嫌ですわよお嬢様。これは貴女の兄ではございませんことよ。既に家を追い出された身……あら失礼、追い出される身、でしたわね。少々言葉を間違えてしまいましたわ」
彼女の言葉を聞いて、ティアラの表情が険しくなる。
「どういうことなの……？」
彼女はアルクを嘲笑い、ティアラの質問に答える。
「まさかまだ話していませんでしたの？　まあまあ、大切なことですのにお嬢様にはまだ話していませんでしたの？　汚らわしい。本当に汚らわしいですわ。お嬢様にお別れもさせずに黙って出て行こうなんて。これでは貴族だけではなく、兄としても失格ですわね。そもそも貴方がエルマニアの名を名乗っていることにも疑問を感じていましたの。このように人としても腐っているのでしたら、やはり旦那様の判断は正しかった、とういことですね。ああ、もちろん旦那様の意見に疑いを持つなんてことはございませんでしたよ。私も最初から旦那様の意見に賛成でしたから」
一気に捲し立て上げ、つぎはティアラに向き直る。
「いいですか、お嬢様。この者は旦那様のご意向により、晴れてこの家を出ることになりましたの」
「それは……本当なの？」
ティアラはアルクに視線を向ける。
しかしアルクはティアラを直視できない。
「お嬢様の言葉すら無視ですのね。負け犬は負け犬らしく逃げ出してしまった訳ですね。本当に情けない」
彼女はアルクに勝ち誇ったような笑みを浮かべた。
「これでエルマニアの腫物7が取れて清々しますわ。ああ、本当に

良かったですわ」
ティアラの顔が歪む。
兄をバカにした自分の従事への怒り、兄を失う絶望、そして上手く擁護の言葉を出せずにいる自分。
ティアラの顔はくしゃくしゃになっていた。
「さあさあ、こんな者は放っておいて部屋に戻りますわよ、お嬢様」
彼女はティアラの腕を引っ張りアルクらか遠ざけようと必死。
「嫌だ！」
「何をおっしゃいますの？」
「いまからにぃさまと遊ぶの！」
「ご冗談を。お嬢様はいまからお勉強の時間ですわよ」
「そんなの後でいいもん！　いまはにぃさまと……」
「あんな落ちこぼれとは関わるのはおやめなさい」
ティアラはアルクを涙ながらに見つめる。また、昔のように助けて欲しい、と。
しかしアルクの口からは望んだ答えは返ってこなかった。
「ティアラ……ぼくはその人の言うとおり、最低な人間だ。出て行くことを黙っていた」
アルクは完全に参っていた。父親から勘当を言い渡され、そして止めとばかりに……。
理不尽で固められた現実はもう嫌だ。
早くここから逃げ出したかった。
ティアラが小さな声で言う。
「そんなのは別に気にしてないよ……」
「僕に構っている時間があるなら、少しでも知識を蓄えた方がいい。ティアラはぼくと違って優秀なんだから」
「そんなことないもん、にぃさまの方が凄いもん！　にぃさまはあたしよりお勉強できるし、魔術だって昔みたいに絶対凄くなる！いまはちょっとお休みしているだけだよ……」
徐々にティアラの声が小さくなっていく。口を締め、涙を堪えて

いる。
「さあさあ、そろそろいいですわよね。もうこんな茶番に付き合うのはこりごりですわ。お嬢様、行きますわよ」
「待って！」
ティアラは従事の腕を振り払い、アルクの元へ。
「にぃさま、これ」
腰に掛けてあったエルマニアの紋章が刻まれた短剣を手渡す。
それは自然四術を扱う際に必須である魔道機。
「お守りに持って行って」
「けど、ティアラはこれがないと訓練が……」
アルクは情けない声しか出せない。
「いいの。新しく作ってもらえばいいし、それにまたにぃさまに会ったときに返してもらえばいいし」
ティアラはアルクに笑みを見せる。
「またね、にぃさま」
さよならではなく、またね、と。
ティアラは従事の女に強引に引かれ、アルクとの距離を伸ばしていった。
最低だ、とアルクは思った。最後の最後に妹に辛い思いをさせるなんて。
何故自分はあのとき言い返さなかったのだろう。言い返せば少なくともティアラこころは救われただろうに。
「戻ろう」
アルクはそう言って、グラディウスの居る部屋へと戻っていった。

部屋に戻るとグラディウスが物を広げていた。タンスや引き出しの中をひっくり返し、どこから持ってきたのか分からないが様々な武器、保存食、宝石、色とりどりに物が集まっていた。
「戻ったよ、グラディウス」

アルクの声にグラディウスは驚いた表情となった。
「随分とお早いお戻りですな。何か取りに戻っていらっしゃいましたか？」
「違う違う、もう用は済んだんだ。だからぼくも手伝おうと思って」
「いえいえ、こちらはわたくしがやっておきますので、お坊ちゃまはお嬢様と一緒に居てやってくださいませ」
「ティアラは……もう寝ちゃった。今日の訓練厳しいらしくて。話てる間にぐっすりとね」
「さようでございますか」
「うん」
ティアラの従事に追い放たれた、なんてことは言えない。
もしも言ってしまったら、グラディウスがカンカンに怒ってあの醜い女のところに怒鳴りに行くのが容易に想像できるから。
最後くらい、ゆっくりとしたい。こころを落ち着かせたい。
そんなことを思って、また自己嫌悪に陥る。
自分のことだけしか考えていない己自身に。
妹も辛いだろうに、自分だけ楽な逃げ道を進んでいることに。
自分は勘当されても、多分どうにか生きていける充てはある。けれども妹は――家の跡継ぎとして日々の訓練、教育、社交界への進出――本来ならアルクが背負う筈だった宿命を受けることになる。そこに私情は挟めない。ときとして友人も切り捨てなければならない。
そしてそこには支えがない。
兄妹で支えあう筈だったのに、アルクはもう居ない。
アルクはグラディウスの隣に行き、荷造りを始める。
「これは何？」
大きな紙袋を指さした。
「これはコック長のロイからです。中には数日分の食糧が入っておられます」
中身を確認してアルクは驚く。

「いいの？　これ、結構高い品物でしょ？」
「さようでございます。ドゥウラゴン帝国の南部で取れる、希少価値の高いフィミィラッグの干し肉でございます。彼もまた、お坊ちゃまを守れなかったことを悔やんでおります。こちらはロイからせめてもということでお預かりしてきた物でございます」
「そっか……うん、ありがとう。ロイにもお礼言っておいて」
「かしこまりました」
その後、順々に必要な物を旅袋に詰めていく。
そして夜は更けていく――。

無残にもときは止まってくれない。アルクの想いも裏腹に日付は変わっていった。
辺りは月明かりが支配する世界。鳥や虫の声すら聞こえない静寂。
アルクは屋敷の外に在留してある馬車に荷物を積み込む。
小柄な体に不釣り合いに大きい袋が一つ。そこに全てを入れてきた。
いまから知らぬ土地へと向かう。子供一人では簡単に帰ってこられない場所へと。
不思議と涙は出ない。悲しいし、辛いし、不安だし、絶望に塗れている。けれども、涙が零れ落ちることは一切無い。
現状が現実として受け止められないのだ。
アルクは無言で馬車に乗り込む。続いてグラディウス。
見送りは居ない。
ここに居るのはアルクとグラディウス、馬車の御者、そして見張り役のティアラの従事。
アルクは馬車の中から一度だけエルマニア邸を見上げた。
……指定の刻になり、馬車は動き始める。

「御着きいたしました」
丁度一日半が経った頃、御者から声が掛かった。
澄んだ空気の匂い。手つかずの自然。野生生物。
近くに集落があるのか、アルクの乗る馬車の隣を人が通り過ぎた。
ティアラの従事は馬車で酔ったのか、我先にと外へ出た。中に残ったのは老人と子供。
「お坊ちゃま、こちらを」
二人になるや否、グラディウスは白い布袋を渡してきた。
「これは……？」
「生きるために必要な物が入っておられます」
アルクは袋の中を見ると、驚いて声を上げ、グラディウスの顔を見た。
中には一目見て高価と分かる宝石がいくつも入っていた。
「これ、どうしたの？」
袋の中から一つ取り出す。真っ赤に透き通るルビーだ。
グラディウスはニコリと微笑むと、アルクに向かい話し出した。
「こちらはわたくしが若いときよりコツコツと貯めてきた財産にございます。昨日寄られた町で換金させていただきました」
あの醜い従事が気分を悪くしたので途中とある町に寄り休憩した。町に着くとグラディウスは大きなカバンを持ってどこかに行ってしまった。そのときに全財産を持ち運びのきく宝石へ変えたのだった。
「これは受け取れないよ……」
アルクは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
今回だってアルクのために首切りを覚悟で当主に向かっていったのだ。
そしていままで努力して貯めた財産を簡単に受け取ることなどできない。
しかしグラディウスは首を振る。
「わたくしは何もできませんでした。亡くなられた奥様との約束も果たせないままです。ですので、これくらいはさせて下さい」

「けど……」
「お金はまた稼げばいいのです。このような金額、わたくしは何に使っていいのか分かりません。それでしたらお坊ちゃまに有効に使っていただけるのがいちばんでございましょう」
グラディウスは宝石の入った布袋を問答無用でアルクの荷物に詰め込んだ。
「ありがとう、グラディウス。それと最後まで迷惑かけてごめん」
「お坊ちゃま……」
グラディウスは鼻を啜る。
「いい加減早く降りていただけませんか？」
あの女の声が聞こえた。
「分かったよ」
アルクは馬車から降り、荷物の詰まった袋を背負う。
「それじゃあ、元気でね」
アルクはグラディウスに向けて言った。
そして歩き出す。
後ろから老人の大きな声が聞こえてきた。
「お坊ちゃま！　わたくしが必ずや迎えに行きます！　どのような手を使ってでも旦那様を説得します！　お坊ちゃまの帰る場所を守っておきます！　ですので、どうかそれまで――生きていてください！！」
アルクは目頭が熱くなった。
こんなにも自分のことを思ってくれている人が居る。
だからアルクは答えた。
「ありがとう」
と。
その一言で全てが伝わるはずだ。
アルクは馬車とは反対方向に進む。
――強くなろう。そしてもう一度、皆の元に戻ろう。
強い意志を胸に、歩き出す――――。

＊　＊　＊

アルクがエルマニア家から勘当されて一〇日。
書斎にて二人の男性が睨み合いを続けていた。
現当主のガルフと、前当主のディック。
ディックは白髪の混じる赤髪を逆立てて怒号を上げる。
「どういうことだ、ガルフ！　何故アルクが、儂の孫が屋敷に居ないのだ！」
「先ほども申しましたが、あ奴は私の判断の元、勘当致しました」
「何を勝手なことを……誰がそのようなことを許した！　言ってみろ！」
ディックはイスに座ったままのガルフに語気強く申し立てる。
自分の外出している間になんてことを……。
ガルフの淡泊な表情は変わらない。
「父上、お言葉ながらエルマニアの当主は私です。父上は三年前に当主としての身を引き、全権利を私が継承した筈です。いまのエルマニアでは私がルール。父上が”現当主”の私に刃向うのであれば、それ相応の覚悟をしてもらわねばなりません」
ガルフは一部分を強調。
ディックは顔を顰（しか）める。
「生意気言いおって……」
「事実を言ったまでです」
ガルフは淡々と言葉を返す。
ディックは苦虫を潰したような表情。言い返せない。感情論を抜かせば、ガルフの言っていることが正しいと分かっているからだ。
ディックは権利継承の際に言ったことを思い出した。「貴族たる家を動かす際には私情を抜かせ」。

ガルフはディックに言われたことを忠実に守っている。これでは年長者たるディックが我が儘を言っているように聞こえる。
「もういい、好きにしろ！」
ディックはガルフを怒鳴りつけ、その身を翻す。
部屋を出て行こうとするディックに、ガルフはすかさず問う。
「どうするおつもりですか？」
「お前には関係のないこと。言う必要はあるまい」
「そうですか。分かりました、いいでしょう。私は父上が何をしようと構いません。けれども、一つだけお伝えしたい」
勿体ぶる言い方に、ディックは青筋を立てる。
「何だ？」
「いえ、話は皆が集まってからに致しましょう。それまではこちらでお待ち下さい」
ディックは鼻を鳴らし、ソファに腰を下ろした。
こんなところで時間を潰している時間はない。いま直ぐにでもアルクを救いに行かなければならない。
いったい何の用なのだ、とディックは苛立ちを覚える。
早く連れ戻さないと。
何せアルクは――。
待つこと数分。
部屋の扉がトントン、とノックされた。
「失礼します、お父様」
弱弱しい声で入ってきたのはティアラ。
何日もの間、食事が喉を通らない。
もともとやせ気味だったこともあり、いまでは完全にやつれ切っている。
そこにトレードマークだった笑顔はない。
死人のように生気がない瞳、青白く変色した肌、こけた頬。
元気よく、活発的だった頃の面影は見る影もない。
そして、ティアラほどでは無いにしろ、胃が痛むような思いで部

屋に入ってきたグラディウス。
役者が揃ったとばかりにガルフは立ち上がる。
「実は皆に伝えなければならないことがある」
「いいからさっさと話さぬか」
執着にも似た想いをぶつける。
何としてでもアルクを……。
「では、簡潔に申し上げます」
その瞬間、嫌な空気が書斎中を支配する。
三者三様唾を飲み込む。
「アルクは死去しました」
皆に驚愕が奔る。
ティアラは膝の力が抜け落ち、その場にへたり込む。
グラディウスはそんなティアラを支えつつも、信じられないといった顔つきでガルフを茫然と見つめる。
唯一ディックが叫ぶ。
「たわけたことをぬかすな！　あれは儂の希望そのものなのだぞ！　そう簡単に……」
ガルフはディックの言葉を遮る。
「老獣に襲われ、手足を失ったところで発見された様子です。見つかった当初は息があったそうですが、エルマニア邸に移送最中にその命が尽きたようです」
老獣はここ一〇年ほど前に最初の個体を確認された謎の生物。顔面が人の老いた顔に似ているためその名を付けられた。
ここ最近になって個体数が劇的に増え、手だれた戦士でも戦えば命を落とすことがしばしある。『白銀の魔術』が扱えないアルクには手に余る敵。襲われたらひとたまりもない。
「父上、既に遺体が届いております。ご案内します」
ガルフが席を立ち、先頭を歩く。
皆、力の抜けたような面持ちで後を着いて行く。

ティアラは父親の言ったことが信じられなかった。
あの兄が……。
あの天才の兄がそう簡単に死ぬはずがない。
ティアラは物心がつく前から兄の背中を追いかけてきた。
六つになる頃には魔術の基礎をマスターした兄。同じ六つになっても基礎を完全に習得できない妹。
ティアラは幼いながらも焦りを感じていた。
この家では力こそが全てだと分かっていたから。
だから力の無いいまのままでは家族に見捨てられる。
本能的に、そう感じていた。
そのことを思い、夜な夜な泣いているティアラに手を差し伸べたのはアルクだった。
自身の訓練の合間を縫い、アルクはティアラにできる限り知識を教えた。
子供ながらに卓越したアルクの教えは指導員より分かりやすく、吸収しやすいものだった。子供同士通じ合うものがあったのだろう。
そうして兄と二歳遅れながらも魔術の基礎を理解、順に『白銀の魔術』を習得。
全て兄のおかげだ、とティアラは思った。
その気持ちがあったからこそ、アルクが『白銀の魔術』を扱えなくなったときも態度を変えることもなかったし、尊敬の念も持ち続けていた。
だから……だから、その崇拝する兄が死ぬ筈がない。
いまこのときまでは、そう思っていた。
ガルフの足がとある一室の前で止まる。以前ここで働いていた使用人が亡くなったときに一度だけ入ったことのある、薄暗いじめじめとした部屋。
ガルフは重そうな扉を躊躇なく開けると、その中に足を進めていった。

煤の臭いが鼻孔を刺激する。
前に入ったと同じ嫌悪感を覚える雰囲気。
中央には飾り気のない小さな棺が一つ。
ガルフは戸惑う仕草を見せながらも、一呼吸の後、棺を開いた。
――中にある”物”はなんだろう。
ティアラは、咄嗟に棺のなかにあるものを人間だと理解できなかった。
片足を無くした下半身。
脇腹を食いちぎられた痛々しい胴。
両腕を無くした肩。
そして――片目を無くした兄の無残な顔。
「っぁ……ああ……」
ティアラは最早声にならない悲鳴を上げ、茫然と立ち尽くす。
「お坊ちゃま……これはいったいどういうことですか……。生きていてくれるのではなかったのですか……」
うっ、と胃の中の物が吐き出されそうになる。
「何故だ……何故こんなことに……。あり得ない、そんなことは断じてあり得る筈がない！」
ディックは目を血走らせ、ぶつけようの無い気持ちが溢れかえる。
そして、ティアラはこのつぎに何をするのか思い出した。
……煤の臭い。
ガルフは剣の型の魔道機をアルクに向ける。――体内の力を炎へと変えるべき作業を行う。
「待って、待ってよお父様！！　にぃさまを殺さないで！！」
「この者は既に死んでいる。ならばエルマニア家の仕来りである火葬に処すのがいちばん」
「いやっ、いやっ、止めてよ！　あたしのにぃさまを……！！」
ボッ、と魔道機の先より部屋の中に明かりが灯される。
それは瞬く間に棺周りに広がり、全てを焼き尽くす。
皮膚の爛れた臭いがした。

部屋全体に熱気が伝わる。
崩れていく兄の姿が見える……。
「いやァアアア！！」
ティアラは燃え盛るアルクに飛び込もうと――しかし寸でのところでグラディウスに取り押さえられる。
「お止め下さいお嬢様！　こんなことをしてはお坊ちゃまが悲しまれます！」
ティアラにグラディウスの声は届かない。
炎上する兄の死体から目を離すことができない。
轟々と音を立てて燃えるアルク。
跡形も無くなる。
そして数分もすれば炎は消え去り、アルクは骨だけとなった姿に変貌した。
「おいっ！」ガルフは扉の向こうに呼びかける。
すると間もなくティアラの従事が駆けつけてきた。
そしてガルフに一礼。
「私はいまからマリーズ卿夫妻主催の晩餐会に出席しなければならない。後処理は任せたぞ」
「かしこまりましたわ。遺骨の方はどうなされましょう？」
「ここに居る者の好きにさせろ」
それだけ言って、他の者には興味すら示すことなく部屋を出て行った。
入れ替わりで幾人かの使用人が入ってくる。
「さあさあ、これを処理いたしましょう。ああそうそう、遺骨だけは別の箱にでも移しておきなさい」
そう指示を飛ばし、彼女はティアラの前まで移動。腕を掴みあげる。
ティアラは向け殻のようにだらんと力なく……。

「さあさあお嬢様、お勉強の時間ですわよ。もうこのようなくだらないことはお忘れになって下さいまし」
「口を慎め！！」
グラディウスの怒号が飛ぶ。
しかしそれを完全に無視。
「お嬢様はエルマニア家を継がなくてはなりませんのよ。こんなところで油を売っている暇はありませんことよ。こちらにいらっしゃいませ」
ティアラは言われるがまま、醜い従事に引きずられていく。
グラディウスはアルクの遺骨から離れることができず、ただただ死人のようなティアラを見つめることしかできなかった。
そしてこの日以降、ティアラの感情が消え失せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1650ba/

黄金の魔術師

2012年1月4日04時46分発行